



## report 01 「信濃の鮭漁」考

石月 升 (新潟水辺の会 副代表)

ここに、当時須坂高等学校教諭だった市川健夫氏の「信濃の鮭漁」という報文がある。

少し長くなるが「現存する鮭漁」の項を引用すると以下のとおりである。



昭和初期の十日町でのサケ漁 (十日町市博物館所蔵)

「現在、長野県下において、西大滝ダムより下流の千曲川水系において僅かであるが、鮭漁が行われている。最近千曲川本流においては鮭が漁獲されることなく、支流の志久見川、月岡川、小箕作川、東大滝川などで、鮭漁がなされている。

漁法は『つづ漁』という<sup>つづり</sup>釜漁業の一種で、直径二尺、長さ三尺ほどの金籠を鮭が遡上するような地点に、昼間定置して、朝引き上げる方法である。

漁期は十月初旬から十一月二十日頃までで、志久見川では二箇所ほど設置され、年産二十本ほどの漁獲がみられ、中には一尾一貫～一貫三百匁程度もある大物が水揚げされるという。遡上の多い時期は十月下旬から十一月初旬で、この頃には小石の多い清流の中に、真っ赤な鮭の受精卵が見ることができ、紅葉に映える木々とともに、この地方の風物詩の一つになっている」

これは1966年(昭和41年)に記されたものである。1939年に西大滝ダムが完成してから27年後のことである。西大滝ダムからの放流量は水利

使用許可の条件とはされていなかったが、すでに魚道が設置されていたことを考えると、 $0.26\text{m}^3/\text{s}$ 程度の放流が行なわれていたものと考えられる。一方、下流の宮中ダムは取水量が $167\text{m}^3/\text{s}$ で、 $150\text{m}^3/\text{s}$ の増量が行われる以前の時代のことである。

先に1957年頃に清津川の支流に鮭が遡上していたことを書いたが、市川氏の報文はこれを裏付けるとともに、西大滝ダム直下の小溪流・東大滝川でも「つづ」による鮭漁が行われていたことを示している。

長野県の西大滝ダムから、新潟県の宮中ダムまでの河道距離は約22kmであり、この区間における流況は1939年の西大滝ダム建設以来基本的に変わっていない。

しかし、40～50年前には鮭漁が行われており、現在はまったく失われている。このことは、宮中ダムにおける許可取水量の増量・放流量の減少(1985年)が鮭漁に壊滅的な影響を及ぼしたことを証明するものであろう。

当会が地球環境基金の助成を受けてサケの復活を目指す活動を開始してから3年が経った。

この間、無水区間や減水区間の無機的な水環境を目の当たりにし、魚類や水生生物の往来を阻み続ける巨大な構造物と対峙しながら改善策を議論し、子供たちとともに願いをこめて稚魚を放流してきた。

10月15日、西大滝ダムの沈砂池で産卵後の雌のサケ(2.5kg)の遺骸が発見され、同28日には雄サケ(3kg)の遺骸がダム湖で発見されたとの情報が入った。

このサケは当会が放流した稚魚が遡上した可能性が高く、千曲川の支流で産卵されているかもしれない。

当面、宮中ダムからの放流量の画期的な増量と、西大滝ダムを越えるサケ軍団の遡上を目標として、歩をすすめていきたい。

## report 02 しなの川考流会 '08 に参加して

恒例の NPO 長野県水辺環境保全研究会との合同研修会「しなの川考流会」が信濃川流域を見て学ぶ研修会として10月4日（土）～5日（日）行われた。

長野からは4名（北野章彦、小林勇雄、小林正登と長野大学の高橋大輔）、新潟からは8名（大熊、加藤、金田、相楽、石月、横山、森本、三浦）の計12名が参加（敬称略）。初めて男性だけのちょっと寂しい旅でしたが・・・。

4日はダムを水力発電に利用している企業との交流も期待し、東京電力とJRの発電所を見学した。

西大滝ダム（長野県飯山市）では、試験放流ということで約20トン/秒を千曲川に流し、179.5トン/秒を取水し、21kmの導水路を流れた水は、落差110mの東京電力・信濃川発電所（新潟県津南町）で水車を回し、発電量は年間約13億キロワットアワーで水力発電所としては佐久間ダム発電所について国内第2位である。4名の社員の方から丁寧に説明して頂き、タービンを通った稚魚の生存率調査など共同で研究できそうなテーマの話も出た。



東京電力信濃川発電所

その後、宮中ダム（新潟県十日町市）では8.5トン/秒を信濃川に流しており、導水先の調整池（新潟県小千谷市）とJR小千谷発電所（同）を独自に見学した。今回は調整がつかなくて、社員の方

から説明が受けられなかったのが残念でした。次回に期待しましょう。

妙見堰（新潟県小千谷市）では魚道で大きな魚が確認できた（魚種は不明、サケではない模様）。宿泊は日本海を望むアネックス飛鳥（新潟県長岡市）で温泉につかり、日本海ブルワリーで地ビールとイタリア料理を満喫。日本酒好きからは少し不満が出る。



大河津可動堰をバックに記念撮影

5日は信濃川大河津資料館でスタッフの樋口勲さんから大河津可動堰や治水の歴史を詳しく説明して頂き、平成12年に完成した新洗堰の魚道観察室ではサケは見られませんでした。様々な魚が観察できました。近くの茶屋で旨い団子を食べた後、横田切れ跡（新潟県燕市、今は記念碑しかありませんが）を見学して解散しました。

今回は東京電力の方と話をすることができ、長野大学の高橋准教授からは小規模なダムでの調査をやってみたいなど、会独自の調査活動だけではなく、様々な分野から信濃川へのアプローチが可能であり、そのスタートラインの旅であったと思います。

世話人 森本 利

report 03

# 第1回「いい川・いい川づくりワークショップ」報告

## 1. はじめに

このたび、9月27日（土）28日（日）と東京で実施された表記ワークショップに参加する機会を得たので、その概要を報告します。この会は、昨年まで実施されていた全国「川の日」ワークショップが衣替えをして開催されました。

発表形式は、全国から集まった60の活動団体が、わずか3分の持ち時間で発表するので、とにかく次から次へと発表する様子は、報告型、絶叫型、寸劇型、熱演型など、審査員へのアピールに、どの団体も懸命でした。その結果、静岡県県の「倉真川」がグランプリを獲得しました。

## 2. 「信濃川」



広松伝賞を受賞する石月副会長（写真-1）

“水枯れの「大河」・信濃川にサケの道を拓こう”をキャッチフレーズに石月副会長が発表しました。信濃川309kmにわたって調査した結果、発電ダムにより一滴も川に水が流れない無水区間や減水区間が70kmもあり、またダムや堰に魚道がないため、サケなどの魚が行き来できない箇所が多くあります。そこで、これらの改善案を提案し、沿線の各地域住民と一緒にサケの稚魚の放流活動を続け、いつの日かに長野県の

松本や上田でサケを見ること夢見て活動していることを発表しました。

翌日の選考会での結果、「信濃川」は、川本来の姿を求め、壮大な活動を行っていることに評価を得て「広松伝賞」を受賞しました。（写真-1）

## 3. 「通船川」

“えがこう未来の通船川”をキャッチフレーズ



通船川のことを地域の人に知って欲しいとアピールする牡丹山小学校のみなさん（写真-2）

に牡丹山小学校の子供たちが発表しました。通船川は、工場や商店、住宅地帯を流下する都市河川です。新潟市立牡丹山小学校は、通船川の近くに位置する学校の一つで、身近にある通船川を知ろうと船で川下りをし、川の現況調査や山の清流との比較調査などをやり、地域の方々からもっと通船川を知ってもらおう広報活動などを発表しました。（写真-2）

世話人 山岸 俊男

# report 04 3000、7200、12800、人口と自然再生（1）

この数字は近代の日本の人口である。3000は3000万人で江戸末期、7200万人は大東亜戦争敗戦後、引揚者を含めた昭和20年の、12800万は平成20年現在の人口である。なぜこの数を問題にするのかはいわば日本近代の現実と近年流行の自然再生の現実をどう考えたらいいのかを今一度再考したいという問題意識によっている。

信濃川であれ、通船川であれ、その他の川であれ、川と人の関係を巡る問題の核心をどう考え、どう評価し、変えて行けるのかはその方法と合意できる戦略が必要なことはいうまでもないが、いままではその問題が意識の上に登ることはなかったように思う。しかし信濃川に鮭を長野県まで遡上させるというプロジェクトの持続的な展開を図ること、そしてその正当性を第三者に納得させるためには当面の当事者である東京電力、JR東日本ばかりではなく、その利益を享受している日本の近代社会住民との合意をどうするのかというタブーに触れることなくして進めることができないばかりでなく、この問題と直面しないで済ますことは『道徳を騙る』ことになると思ったことによる。

江戸末期の人口が3000万人であり、江戸時代を通じてほとんど人口が増えなかったといわれている。それはかつてアジア的停滞などと揶揄されてきたが社会的な仕組みとして人口増加を抑えるシステムが嬰子殺し、老親殺しという形で存在してきた。この問題を非人間的であるという理由で非難するつもりはない。社会的な生産のほとんどを自然の生産力に頼ってきた江戸時代の人口の限界が3000万人であったということは議論のあるところであるのかもしれないが日本という小さな島国で農業生産だけで3000万人を養えるということは、江戸時代を通じて単位面積あたりの収量の増大のための技術開発と新田開発が実施されてきた結果とはいえ、当時の世界の技術水準からみても驚くべきことである。それはとりもなおさず日本の自然風土の豊かさの証明でもある。

明治維新が外国からの圧力によるものなのか、

あるいは江戸時代の中から生まれた軋轢を解決するものとして起こったのかを議論する能力は私にはないがいずれにせよ、明治時代から現在に至るまでの日本の人口増加は爆発的といえるものであった。それは表題にしめしたとおり江戸末期を基準とすると昭和20年で2.4倍、現在は4.2倍ということになる。この増加の主要な原因は農業社会から工業社会への転換と人口増加が豊かさの尺度であるとする素朴ではあるが蒙昧ともいえる私達の無意識ゆえであったといえるのかもしれない。負の近代史を脈わけてきた多くの事件、戦争、公害、棄民、の遠因はまさにこの人口増加と社会的生産の矛盾をどう解決するかというものであったといえる。そして現在人口増加が極大点を過ぎ無限成長を前提にしてきた社会政策の歴史的変換の明確な展望を描くことができず、そして国民への社会的、生態学的持続可能性の戦略、そしてその現実と覚悟の説明ができないまま未来への不安だけを増殖させている。現在本当に考えるべき課題は更なる人口増加とそれを支える経済成長を再度構想することなのだろうか？あるいは他の選択肢を構想することなのだろうか？

自然環境を破壊する一番大きなファクターは人口増加によるものであるとはよく聞く話である。人が増加すれば食料、燃料、住宅材など、あらたに土地を開き求める必要がでてくる。森を切り開き、薪をつくり、畑を作り、小屋を作ることから始める必要があり、人が生活すれば排水が川に流れ込み、ある限度を越えた時点で自然再生能力は森であれ、川であれ著しく劣化する。人の歴史は人の内部の歴史はどうあれ、対自然に視点を移すと、この不可逆なプロセスであったに過ぎない。それに加えて近代社会とは化石燃料というエネルギーの燃焼が不可欠であった。化石燃料とは人の歴史をはるかにこえた地球上の植物、動物と環境の歴史、時間の堆積による結果である。そしてその燃焼とは想像することしかできない長い時間による地球の生物・化学的な結果を瞬間的に振り出しに戻す行為である。太古の昔の地球の大気は二酸化炭素とメタンガスの濃度

report 04  
**3000、7200、12800、人口と自然再生 (2)**

が現在よりきわめて高かったということもある。近代社会になってからの爆発的な人口増加はまさに自然の歴史を短時間に消費することによって始めて可能であったのであり、その条件は西欧に始まったが日本でも変わらない。しかし今その増加が極大点を向かえた。このことの意味は重大である。このことの本質的な意味はもはや私達の日本社会がこれ以上の人口増加に耐えられないという判断を多くの日本人がしたことによっているのではないか。様々な異論はあるのだろうが様々な意思の総和としての人口増加停止は今までの社会システムの限界を暗示している。それは自民党か民主党か共産党かというレベルの話ではなく、人の歴史とは何かを根源的に再考しなければ自滅へと向かう危機であるように思う。

川の再生とはその危機感の表れであるともいえる。川であれ、山であれ、海であれ、人の手の届かぬところはなくなり、それら自然からの収奪と廃棄物の拡散は限度を越え、もはやこれ以上の自然からの収奪と環境への廃棄は不可能である環境限界が目まえに広がり始めている。このことが人口増加停止の本当の原因の一つである。この時点で川の再生、山の再生、海の再生が語られ始めたがそのことの意味がなんであり、あらたな人と自然の枠組みをどのように構想し、そしてその構想がいかなる社会的な説得力を持ちうるのか、そして自然との共生の現実とはどのようなものかを問わねばならない。

人は自らの存在を否定されることに耐えられない存在なのかもしれない。しかし今そのことを含めて再考する議論の場を設定することが不可欠であるように思う。その場とはタイタニックが沈没し、定員を満たさない救命ボートに誰が残り、誰が自ら死を選ぶのかを選択する場と似ている。またそれは敗色の濃い伸びきった戦線を撤収し、疲れきった兵員の消耗を可能な限り少なく安全な砦まで退却させる後退戦にも似ている。そしてこの問題の困難さはこの処理を間違えると当事者全員が失われるという条件がついているということである。議論をシリアスにするためにすこし挑発的な提案をしたい。日本の適正な人

口を農業だけの生産力で養うことができた3000万人と仮定するのである。この仮定は根拠のないことではない。江戸末期に日本を訪れた外国人の日本の風景についての印象はどれも『美しい国、日本』であった。日本の人と自然の共生モデルの最後を江戸末期と考えるということである。このことは工業化による人口増加を日本史上の一場の夢と考えるということであり、3000万人を基準に21世紀の日本の後退戦を構想するということである。困難な撤退である後退戦の真髄は難死や戦死、憤死という形に人を追いやるのではなく『彼岸に渡る悟り』を用意できるかということにある。誰が生き残るのかを決めること、それを他人が決めるのは恥知らずの不遜である。自らの限界の確認と死を受け入れる人類発生からの3万年の歴史の智慧がためされる。21世紀に人の死を積極的に評価する宗教が必要な理由がここにある。

それにしても近代社会が実現したものは人口増加ばかりではない。人権宣言があり、世界に対する遠近法の確立があった。これらのすべてが無価値であるとは思わない。これらのすべてを含め私達の文明の母である自然との共生という濾過装置をくぐらせることでその価値を問い直すことが必要である。そのことで私達人類の地球上で生きてゆく資格の有無が決まるとおもう。信濃川に鮭を長野県までの遡上を回復させるということは川と人の関係の再構成の一つである。それは目の前の利益よりも持続的な存在への資格を選ぶことである。はたして今の日本人にその選択ができるのだろうか？死が津波のように押し寄せるまでその選択ができないのなら人間とは元来その程度の存在なのかもしれない。合掌。異論、反論を期待したい。

会員 横山 通

## 活動、調査・研究を通して見た、新潟水辺の会



子ども達に水辺の生き物について説明をする。

信濃川、そして阿賀野川... 大きな河川が大地を見守り豊かに育てる——そんな美しい新潟の地で、私が新潟水辺の会に会員として、そして調査・研究の一環として関わらせていただくようになってから、はや2年が経とうとしている。「川」と「まち」との相互作用に目を向け、市民主導での川づくり・まちづくりを大事にして活動していきたい——水辺の会の魅力は、活動に関わる様々な人々の“あたたかな想い”にあるのだろう。初めて参加した活動で、身近な水環境についての発見を、ひとつひとつ生き生きと感じる子どもたちの姿がとても印象的であったのを覚えている。生き生きと活動をするその姿が、地域に「伝える」力の大きさを活動を通して実感してきた。

水辺の会は、市民、行政といった人々が想いを一つにして協働している、全国的にも興味深いお手本であるともいうことができる。また、他県の環境団体との河川の共同研究や水辺環境周辺の地域コミュニティとのまちづくりを協働するなど、独自のネットワークを作っている。水辺の会は、地域住民、水環境を守りたいと考え活動する団体、そして行政とをつなぐ、橋渡しの役割も持っている。楽しみながら活動をすることで川に接し、地域に身近な川を作っていく活動は、着々と地域に根付いていると感じられる。様々な人々と協働し、

楽しみながら活動をしていこう、これこそが「川」にも「まち」にとっても一番有効な環境保全の方法であることは、水辺の会の活動によって確かなものとして表れている。

水辺の会がより一層地域とともに発展していくこれからは、新潟の地をさらに魅力的なものにしていくだろう。

三橋奈緒（会員・東北大学大学院生）

### 秋の菅名岳山歩き



久しぶりに再開した菅名岳山歩きの報告です。当日は文化の日で晴天の特異日のはずでしたが、生憎の空模様で参加者は浅井さんご夫婦と私の3名でした。

午後から雷が来るという予報でしたので、天気の良いうちにブナの紅葉を楽しみながら、頂上までは行かない短縮コースで行いました。

胴腹清水で喉を潤し、帰る途中、駐車場に到着間際に雨に降られてしまいましたが、楽しい時間を過ごすことができました。

世話人 和田 日朗



report

# スローな水辺のマンガ“AQUA”“ARIA”



水辺を舞台にしたマンガというと何を思い浮かべますか？やっぱり釣りバカ日誌とか釣りキチ三平などの釣りものでしょうか。

今回紹介するマンガは『AQUA (1～2巻)』『ARIA (1～12巻)』（いずれも天野こずえ作、マッグガーデン刊）です。ちなみに「ARIA」は「AQUA」の続編になります。

このマンガの時代設定は2301年で、火星はテラフォーミングにより人々が移住し、水の惑星「AQUA」と呼ばれています。舞台は火星につくられたネオ・ヴェネツィアという街です。

地球のヴェネツィアは気候変動により水没してしまい、ネオ・ヴェネツィアは火星にヴェネツィアの街並みをそっくり再現した街です。そして単に街並みだけを模倣したものではなく、人々の生活様式や年中行事なんかも今のヴェネツィアの様子を引き継いでいるように感じられるところもこのマンガの魅力の一つです。

この時代の地球（マンホーム）の生活は合理化・自動化が進み、ネオ・ヴェネツィアの生活は現代に近い感じで描かれています。私達が忘れてしまっている不便さを楽しむスローな生活を描いています。そしてこの街にはマンホームから懐かし

さや街のあたあかさを求めてたくさんの観光客がやってきます。

ヴェネツィアの観光と言えばゴンドラですが、ネオ・ヴェネツィアでもそれは同じです。

このマンガの主人公達はゴンドラでお客様を案内するウンディーネ（水先案内人）です。ヴェネツィアのウンディーネは筋骨隆々としたイケメンがやっていますが、このマンガでは女の子がウンディーネとして登場します。ウンディーネはネオ・ヴェネツィアでは「水の妖精」と呼ばれ、観光の花形なのです。

主人公の<sup>みずなしあかり</sup>水無灯里はマンホームからアクアにやってきた見習いのウンディーネです。彼女は何気ない日常の中からステキな物事を発見し、それを楽しむのがとてもうまい少女です。自分もそんなふうに住らせたなら毎日が幸せな気分です。自分もそんなふうに住らせたなら毎日が幸せな気分です。自分もそんなふうに住らせたなら毎日が幸せな気分です。

この物語は灯里と一緒に一人前を目指す仲間達の日常を四季を通じて描いているものです。

マンガといえば絵も大事です。街並みの描写もとても美しく、キャラクターもかわいく生き生きと描かれています。ストーリーはどこか懐かしくもあり、不思議でもあり、心温まるもので世界観がしっかりしていて完成度の高いマンガです。

このマンガはアニメ化もされていて、透明感のある水の描写と音楽がとても心地良く、マンガの世界観がよく表現されている作品です。

このマンガに出会って旅が嫌いな自分でも一度ヴェネツィアを訪れたいと思うようになりました。

そして、この文章を書いているうちにまた最初から全部読んでみたくなりました。

会員 杉山 泰彦

**編集後記:**最近、車（自家用車）をやめました。地球環境を考えると表向き、ガソリン代の高騰と古い車の燃費の悪さに気づいたからです。でも実際は自転車意外に便利だとわかったからです。アルビレックス新潟のゲームでは自宅からビッグスワンまで35分で行けます。バスにのると1時間はかかります。運動不足の生活では自転車は健康にもグー。坂がきついですが新潟市内は意外に平坦で信濃川沿いのサイクリングロードは古町や万代シティに行くにも景色が良くて気持ちいい。バリアフリーが徹底してきているのか車道と歩道の境目も昔ほど段差は無くなりました。あとは自転車が安全で走りやすい道路整備を望みます。

編集人：森本 利

## 表彰・受賞のおしらせ

国際ソロプチミスト新潟から環境貢献賞を受賞！



国際ソロプチミスト新潟（小島節子会長）から当会に対し環境貢献賞が授与されました。  
10月18日（土）、ホテルイタリア軒にて授与式が行われ、大熊会長が表彰状と金一封（10万円）を頂きました。  
頂いたお金は活動資金として大事に使わせて頂きます。  
ありがとうございました。

大熊 孝会長が日報文化賞を受賞！



大熊会長が10月31日、ホテルオークラ新潟にて、新潟日报社主催の第61回新潟日報文化賞（社会活動部門・個人）を「新潟水辺の会代表」として受賞しました。  
受賞理由として「20年にわたり会代表を務め、地域と積極的にかかわり県内の河川・湖沼の再生浄化や景観保全に尽力」というものです。  
副賞はブロンズ像と金一封（30万円）です。  
大熊会長は「皆さんとの20年に及ぶ交流のおかげでいただいたもので、大変光栄です。」とおっしゃっていました。

## 入 会 案 内

この会は、遊び半分・真面目半分で活動しています。  
ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。  
自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。  
今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。  
この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年：1987年10月15日 ■目的：水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 ■代表者：代表 大熊 孝（新潟大学工学部教授） ■会員数：個人212名・法人11団体（2008年11月15日現在） ■活動：水辺シンポジウムの開催 / 水辺ウォッチング / 会報「新潟の水辺だより」の発行 / 水辺環境整備に関する学習会 / 長野県富山県の水辺グループとの交流会 / 通船川、佐潟の調査・研究 etc. ■年会費：個人会員一口1,000円を2口以上、賛助会員（法人など）一口5,000円を2口以上

入会申込書

年 月

|           |         |         |
|-----------|---------|---------|
| フリガナ氏名    |         | 男・女     |
|           |         | 歳       |
| 特技や水辺への想い |         | メールアドレス |
| 住所        | 〒 ( ) - |         |
| 職業        |         |         |
| 勤務先       | 〒 ( ) - |         |

注)紙面の都合上、縮小しています。  
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

●発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局

〒950-2264

新潟市西区みずぎ野4-7-15 大熊 方

Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

ホームページ

<http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/>

メール mizubenokai@plum.plala.or.jp

(メールアドレスを変更された方は事務局にご一報下さい)